

遠 淵 湖 へ

稚内の旅館で滞在が 1 週間ほどになった。当時の稚泊連絡船は宗谷海峡の敵潜水艦出没情報によって出港時刻が不明で足止めを受けていた。乗船の連絡が入り、教授引率のもと連絡船に乗り込んだ。対潜監視から昼間に航行することになり能登呂半島を左舷に見ながら亜庭湾を大泊へと向かった。

遠淵湖に樺太寒天株式会社が運営管理している事業場があり、そこで宿泊しながらイタニグサ (*Ahnfeltia plicata* (Hudson) E. F. ries) という紅藻類の寒天原藻採取と分布を調査することになっていた。

8 月 1 日大泊到着、港でイタニグサの生態研究に努力されてきた先輩の出迎えを受け、木炭バスに乗り込み遠淵湖にむかった。

事業所宿舎は飯場そのもので一同はストーブを囲んで寝ることになる。今から思えば夏時刻で日本の標準時より 1 時間早く、生活は午前 4 時起床だから内地の午前 3 時に起きていた。

ここ事業所宿舎のすぐ隣が海軍千歳航空隊遠淵分遣隊基地であった。星葉専から学徒動員された大尉を隊長に、同じく学徒出身の数名の飛行士官と整備、通信などを担当する数十名の兵員が配備された小規模の基地であった。

1 日 1 回大湊まで連絡に水上機が往復していた。隊長の好意で郵便物があれば大湊へ運んでやるといわれた。片道切符のようで心もとなかったが皆せっせと手紙を書いていた。隊長は私達に対しては寛大で、基地への出入りもかなり自由に黙認してくれていた。日々の作業は索敵行に出撃する水上機の爆音を聞きながら、連日、八尺桁網で湖底をさらえイタニグサを採取する重労働だけだった。